

目 次

五十年前	七
思ひ出る儘の記	四
幕末における武士の風俗	三
幕末の江戸風俗(脇差、刀剣の附属品)	二
幕末の江戸芸者	九
兵馬倥傯の人	一〇
江戸の暮と正月	一〇
昔しの日本橋	一三
五十年前には一銭で蕎麦が六杯	一五

幕末の江戸風俗

五十年前^{ぜん}

歴史は僕に種々^{いろいろ}な事を教えてくれた。

その教えたのは、単に政府の交代や、人間の生死^{いきまに}の事ばかりで無い。世間のあらゆる事物の進退、消長について説明し、指示してくれた。すなわち生物学は、人獣虫魚、すべて生有る物の歴史である。経済学は、国家の一員たる、もしくは一家の私人たる我々が生活上、須臾^{しゆゆ}も離るべからざる物貨についての歴史である。その他神学でも、哲学でも、美学でも、兵学でも、およそ学問と名のつき、その事物の連続的、系統的に組立てられたものは、皆歴史である。だから歴史は、人生の全般^{すべて}だ。僕、否^{いな}、誰でも、この意味からの歴史には、日常細大の事を選ばず、これまでも教えられて来た。おおかた今後も教えられつつ、その生を送るであらう。

7 五十年前

その中^{うち}、僕の最も深く教訓せられたのが、維新当時の社会変遷の学である。この中に

はその多くを含む。ほとんど学問としての全体を含んで居た。すなわち一方、因果の公律(1)から、一方、靈肉の双関にまで、華麗に、精確に、明白に、的切に、むしろ残酷と思われるまで、僕等が面前まえにパノラマ的展開をなして、沈痛の教訓を与えてくれた。

——僕の修養(とも言い得べくんば)は、実に、全くここに在る。

爾来じら五十年間(僕は嘉永元年の生れで、この維新の慶応四年は二十一の年だった。慶応四年、すなわち明治元年だから、今年大正四年まで四十八年。約五十年ということになる)の生活の取捨、進退去就。別に議論らしい議論も無いが、有ればその実践から得た議論。更に言うべき操守もないが、有ればその実感から来た操守で、僕の全般すべては悉皆みなこの裏うちから出た物である。

それがほんの一部を書いたのが、この短著である。これは先年博文館(つこ)の需もとめに応じてその雑誌に上のぼせたもの、その時は明治三十五年だから「三十五年前」と名を命つけたが、今は五十年後の回想録となるのだから「五十年前」と改めた。

他人は知らず、僕にはこの書いた事実ことごとが、全く右の一代の教訓だ。すなわち僕が身における、特殊の「歴史の教訓」だ。

維新の当時、——慶応三年の暮から翌四年、すなわち明治元年に互あたる江戸の変遷の有様を、私が見た通り、否いな、むしろ出遇であったままのそのままを毫すこしも飾からずに、小説氣しょうせつぎ

を離れて話をして見ようと思ふ。——然様、その順序は、三年の暮の芝の薩州邸焼討がまず最初であろう。それから淀鳥羽の戦争を江戸で聴いた時、前將軍家（慶喜公）の東帰、江戸の開城、その冬に私共が静岡に移住した時の惨状。かの地へ行つてから旧幕府の武士——所謂無祿移住の士族の面々が如何な艱難を嘗めたかという、その物的、心的、両面からの非常な圧迫を受けた、其事なのだ。

蓋うにこれ等の次第と云うは、今なお親しく見聞された御人もあろう。しかし實際その艱難に出遇つて見た者で無ければ知らぬ話も多くある。いやまたその難義と云つたらとても想像などの及ぶべきものでは無いから、無論明治の以後に産れた御人には夢にもと云うものである。で、あるいはこれは維新史編纂の材料の片端にもなろうかとも思うのが一つと。今一つは、近ごろ或る一、二の小説などを見ると、かの当時の事情と全で反対した事が書いてある。例えばあの時徳川氏の旗本家人で「朝臣」と云うになつた人達を、何か非常に拔擢でもされた、栄典でも蒙つたように云つてあるのも往々有る。処がその実、右とは正反対で、あの時朝臣になつた者をば官軍の方でも余り珍重せぬ。ましてその世間からは非常に妙な悪感情を持たれて、——詰りは「開化ぬ」という話であろうが、魚屋八百屋でもその屋敷には物も売らぬと云うような有様もあつたのだ。それからしてその当人もその当時は人にも面会せず、偶会えば赤面して、「私共も駿河へ御供

をしたいたのですが、家内にこれこれの難義がある」とか、「親類に云々の苦情が出た」とかで、「誠に残念ながら、実に、余義なく……」と捫手もみでをして謝あやまっていた位くらいである。だから当時の有のままを正銘せいめいで語いつたら、あるいはその意外に驚かれる人もあろうが、その驚かれる処ところがこの話の生命いのち。長生をして見ると、また思い寄らぬ色々の面白い事もある。

薩州邸の焼討

は慶応三年の十二月廿五日と記憶おぼえている(焼討というよりもむしろ自焼と云うべきだが、当時世間で皆焼討焼討と云ったからここもそう書かいて置く)。これは当秋このの頃から江戸市中に、強盗おしこみ、辻斬、種々物騒いろいろな事が流行はやつて、夜になると日本橋京橋かいわい、神田、芝、品川あたりの盛り場にも人通りの絶たえたことがある位くらいであつた。それで市中の諸所に屯たむろ所ところ(寺院または大家などを以てこれに充あつ)が出来て、別手べつて組(1)(幕府の旗本家人の当主次三男厄介にかかわらず、剣槍馬術の心得ある者を選むというので、最初は高輪の東禅寺(2)、三田の済海寺(3)、品川の東海寺等(4)の異人館、すなわち外人の居留して居る寺院の警護に附けられた。後には見廻組(5)と改称したかに思つて居る。その頭かしらで名の聞えたのは多賀外記(6)である)、撒兵組(7)(以前の御持弓組、御持筒組、すなわち俗に「御持組」と云った与力同心、並ならびに御坊主などから組立られた銃隊)、新徴組(8)(旗

本家人からも出たが、首に諸方の浪士を集めた組で、後には新選組と称つた。近藤勇、土方歳三などの諸豪傑も此組から出た。荘内の酒井左衛門尉殿の手に属て市中の見廻りを専務として居た)等がその屯所に詰切つて、市中の「巡邏」というのを為ていたが、中々息まない。しかもその賊は皆武士の打装で、二人三人、多いのは五、六人も組んでいる。浅草蔵前の蔵宿、深川木場の材木屋などへ入つた者は七、八人以上も居たというので、何分これは普通の賊ではあるまい、この節諸方から入込んで居る浪士(後に云う憂国の志士)等の所為か、あるいは二大藩の家来か什麼かと云う穿議で、ある時岡引の一人がかの賊の迹を跟けて見ると、それが果して芝の薩州の蔵屋敷(今の薩摩原)へ入つたと云う。さてこそ、と云つたそれからがこの騒動。

私の家は幕府の家来で、そのころ市谷合羽坂上——今の仲の町——に住んで居た。この年私は廿才。父は講武所の槍術世話心得取締(父が槍術の師匠は牛込東五軒町に居た林肥後守殿抱の伊能一雲斎。この人は当世の豪傑で、その伝は依田学海氏の著『譚海』にも出ていたかと思う。私もその子矢柄氏について槍を学んだ。矢柄氏はその主林氏に属いて箱根から函館に脱走したが、目下は府下巢鴨村に住んで居られる)から徒目付に転じて、この時は他所へ出張して居た。で母はその旅中の無事を祈るといふので、赤坂の豊川稲荷へ日参をしていたが、この日はたしか不快か何かで私が代参を言附られ

て、朝飯を終った丁度辰刻頃(今の八時)合羽坂の宅を出ようとすると、半鐘が鳴る。火事だ! 「何処だか」と聞くと、「芝だ」と云う。「ナニ通例の火事だ」と思つて、摂津守坂から荒木横町、四谷の大通りまでぶらぶら行くと、消火夫などが駈けて行く。やがて掘端へ出ると、成る程煙が見える。大火事だ。それでも戦争などとは思ひも寄らず、紀国坂から右の豊川の社(今は往來の北側だが、その頃は南側)へ參詣して、帰り掛けたが、世間の様子がどうも変だ。そのころ赤坂には火消屋敷があつて、その与力の浅井と云うへ私の叔母が嫁いている。そこへ寄つて聞いて見ようと、「叔母さん、火事は?」と上り端から声をかけると、叔母は奥から目を丸くして来て「おや、お前かえ、如何お為の? 火事じゃ無い、軍だよ! 薩摩様の焼討だよ! 叔父様などは最う疾うに出てお仕舞の!」と云う。叔母の口気では、私の此辺にぶらぶらしているのを異んだもののようにだが、何にその叔父の出張も、討手では無い、火消与力だから消防の為なのだ。

が、戦争というので、私も驚いた。勿論その前から薩長と云えば幕府の敵、しかもこの賊も薩藩であるなどの事は誰言うとなき風説には聞いている。さては愈々開戦つたのかな、とかつ駭き、かつ勇んだが、兎に角その勝敗というが気に懸る。怖い物見たしと云うもので、ここを飛出して、溜池の端から虎の門外、愛宕下通りの藪加藤の門前まで行くと、流石にこの辺は人氣も騒立つて、人の眼もきよときよとしている。荷物を片

附け、土蔵の目塗(27)などまでして居る家もある。山の手から出た消防夫などは火掛りも出来ぬので、階子(はしこ)や纏(まとい)をそこらに立てて、鳶口(とびぐち)を組合(くみあわ)して居る。するとそこに居た一人が「若様何方へ？」と声を掛けた。見ると其者は、毎日私(わたくし)の家へ商(うち)いに来る魚屋だから、「火事場へ行く」「いやそれはお危険(あぶな)い。御成門(28)(増上寺)(28)辺りにや大勢詰(あ)ていて人は通しません。今見て来ましたが、貴君(あなた)のような人が一人捉(つか)まった。お廃止(やし)なさい。劍呑(けんのみん)だ」と切りに抑止(とどめ)する。「だが戦争は？」「ナニ軍(いぐさ)？ そりゃ今朝(けさ)の辰刻頃(いつつ)です。最(も)う有りません。薩摩(さつま)が負けて酒井様等(さか)の方が勝つたのです。今はその逃げた者の穿議(せんぎ)です……」委細(わが)は判明(わ)つた。

成るほど穿議(せんぎ)で往来(やうらい)が厳(げん)ましいのか。それでは詰らぬ。それは兎も角、先(ま)ず勝(か)たとあれば嬉しい、と悦(よろこ)んで引返したが、その時にまた驚いたのは、また以前の道(みち)を四谷へ来ると、いや太平至極(たいへいしごく)なもの。此辺(こゝら)は那麼(そんな)戦争(いくさ)ではない歳暮(としご)の騒(さわ)ぎ。大横町(29)には市がある。富山(とみやま)(有名な呉服店)には客が一ぱい。紙鳶(たこ)はあがる、鯨弓(うなり)は聞(き)える、羽子(はね)はつく、獅子舞(しし舞)の太鼓(ね)の音はする、絵双紙屋(31)には人が多集(たか)つて役者の似顔画(か)を馬鹿(か)な面(おも)して眺(なが)めている。目と鼻の間の芝、——火事はまだどんだん燃(も)えている。——その燃(も)えている芝で戦争(いくさ)があつて、謂(いわ)ゆる兵燹(いくさ)で人家(ひとのいえ)が今焼(や)れているのである。それをただ一跨(ひとまた)ぎの四谷で、長崎の葬礼(とむぎ)を江戸で聞くと云うような調子で、往来(やうらい)は絡繹(らくえき)、人は皆近(みな)づく春の経営(いとなみ)に余念(よねん)な

しと云う景色を見て、私もそののん気さ加減には少なからず呆れた。

この時焼けたのは、右の芝田町の薩州の蔵屋敷(三田の上屋敷も焼けたかとも思う)から西応寺近傍、金杉四丁目から本芝一丁目二丁目あたり、また二の橋脇の島津淡路守の上屋敷、芝田町の札の辻から先方。ここと南品川の橋向う辺は薩藩の落武者が傘に火をつけて軒に挿して歩いたので焼けたのだと、翌日聞いた。また高輪の下屋敷(今の毛利邸)も同じく焼けた。

さてその翌日から掛けて四、五日というものは、市中の貧民(中には貧民ならざるも)がこの諸屋敷の焼跡に押掛けて、家中の長屋から焼残りの土蔵その外を打毀して、米錢器物その他の有らゆる物を持出した。幕府の方でもそれを制めたが、中々肯かない。何でも七八日経つ中に、塵葉一つ、焼釘まで綺麗に攫って持ち去つたとの事だった。

その中に、ある庫には、銅台に金鍍金した贗造の二分金が巨万あり、またある庫には、電線(絹糸で絶縁した物)が一ぱい詰っていた。ある人が其物を私に見せて、「此物が電気装置の地雷火の導火だ。最う少し遅延したらばあるいは江戸中、此物が為に焦土にされたかも知れぬ」と舌を慄わして話して呉れた。私も分らぬながら肝を潰した。

しかし、この後の江戸市中はやはり太平無事なもので、例歳と変わらず、餅搗き、松飾、紙鳶、羽子、厄払い、借金取りの声の裏に三年は暮れて、翌れば慶応四(戊辰)年の

めでたい正月はのどかに来た。

正月になつても市中その外、表面は賑かで、礼者も来る、獅子も来る、鳥追も万歳も来る。明けましては御慶の年賀に、謂ゆる初春の気分は内外に漂よつて、初東風のささやきを門松の注繩に聞きつつ、元日から二日三日と過ぎたが、焉んぞ知らむ、この時はこれ

鳥羽伏見の大戦争

で、徳川氏三百年の基礎の顛覆に瀕める際ならんとは！ しかし電信も鉄道も無い当時、いかな早追でも江戸大坂間昼夜二日半で無ければ通ぜぬという時節であるから、これ程の大事件をも人は太平の屠蘇の酔夢。前將軍家の御供に立つて京阪に居る人々の留守宅でも、「可嫌な話(慶喜公の御辞職以来、上方の紛糾する話)ばかりで困ります、宅でも早く帰つて来てくれますれば好うございますが」位いなもので、依然例年の雑煮も祝つて、二日の初夢に気楽な宝船も買つていた。

処が、十二日の夜であつた。私はその頃大久保の十騎組(今の富久町)の内藤という人に英学の句読を授つて、この夜もそこで稽古を終つて、恰ど宵の戌刻過ごろ、谷町から念仏坂、三軒屋という所まで来ると、薄月夜に手丸(提灯)を点けて、「直さんか？」と慌てた声で呼留めた人がある(私はその頃直太郎と称つた)。「誰？」と見ると、それは

松岡万(まつおかまなむね⁶)(新選組の世話役かをして、私の父の旧同僚内海氏の甥おい。この人は平山行蔵(へいざん⁷)子の風を慕こつて奇行に富ゆんだ人)という人、声も容よう子も非常ひじょうに何か迫立せきたつてゐる。什麼どうしたのかと訊きくと、「いや実じつに大変たいへんです。京都は大戦争。敵は薩長さつちやうで、御味方大敗走かみ！上(慶喜公)にも昨夜蒸気船ゆうべで御帰城おかえりです。内海の伯父おふなども討死うちじしたかどうか知れませんか(内海氏は当時京都の見廻組みまわりぐみ⁸)。私は今其事そのことを知らせて来きました。貴方あなたも最もう御覚悟ごかくごなさい！」と真まに血眼ちまなこでゐる。

聞かされた私も、実に仰天おうえんした。何が何やら夢のように、身ばかり戦慄せんりつえた。「貴君あなたはどう為なさる？」「私はこれから隊中を集めて御沙汰次第(ごさたさいじ)に出張しゅさつします！」と云つて、一寸黙もくつて、「これから高橋勢州(たかはしせいじゆ⁹)の家へ行く」と言つたかのように記憶おぼえているが、そのままで氏は駈かける如ごとくに去いつて了しまつた。

私も、前の薩邸焼討さつていせうとく以来、この結局おさまりは何麼落著どうつづくものかと、心暗ひそかに心配しんぱいしていた。すると八日か九日頃から「京都で戦争いくさが開始はじまつた」と云うような風説ふうせつ。——それは真まに風ふうのような説せつなので、誰たが言いうとも無なくちらちらと聞きえたが(こう云う説は、多く御城ごじやうの御坊主ごぼうしから漏泄もれしたもので)、固もとより取留とどめた話でもなく、しかし容易やすならぬ事と思つたから、しかるべき人の処ところへ行いつて問合もんあしても見たが、いずれも判然はつきとした事は判らぬ(この時ある家で、慶喜公が薩長弾劾さつちやうだんかくの奏聞そうもんの写書うつしというものを見た。しかしこの時分ときぶんには斯様こん